

# 『理工学系話し言葉コーパス』 における受身表現の出現傾向

岡 葉子・菅谷有子・遠藤直子・  
白鳥智美・森 幸穂・伊藤夏実

## ◆要旨

**本**調査では、理工系大学院におけるゼミの発表や質疑応答を収録した『理工学系話し言葉コーパス』を対象に、受身表現の使用実態について、用法分類や文中の受身表現の出現位置、後接する複合辞や前接する動詞などの観点から調査・分析した。その結果、アカデミックなコミュニケーションにおいては、①モノが主語である「非情の受身」、②「受身形＋ている」の形、③「受身形の連用中止」の用法、④「考える」「言う」など初級レベルの動詞が「-(r)areru形」で多く出現することがわかった。本稿では、上記の表現について、初級レベルでも学習者のニーズに応じて導入し、「考えられる」「言われる」などは、文法項目としてではなくフレーズとして、適宜取り入れていく必要性について述べる。

## ◆キーワード

アカデミックなコミュニケーション、  
受身表現、「-(r)areru形」、話し言葉コーパス、  
理工系留学生

## ◆ABSTRACT

This study investigates the passive expressions which appear in the “Science and Engineering Spoken Japanese Corpus” and analyzes their variety and occurrence. The study reveals that passive expressions are frequently found: 1) in inanimate subject sentences, 2) when followed by *-te iru* form of verbs, 3) in *renyou-chuushi* (the predicate of cosubordinate clauses) of passive form, 4) when used with *-(r)areru* form of the basic-level-verbs, such as *kangaeru* (to think) and *iu* (to say). The study suggests that the use of passive forms such as *kangaerareru* and *iwareru* should be introduced at the beginning level of Japanese language learning as phrases rather than as complex grammatical structures.

## ◆KEY WORDS

academic communication, passive expressions,  
-(r)areru form, spoken corpus,  
learners of Japanese in the fields of science and engineering

## The Characteristics of Passive Expressions in the “Science and Engineering Spoken Japanese Corpus”

YOKO OKA, YUKO SUGAYA, NAOKO ENDO,  
TOMOMI SHIRATORI, SACHIO MORI, NATSUMI ITO

# 1 はじめに

受身表現は、初級後半レベルにおいて学習する項目ではあるものの、中級以降も学習者がそれを自在に産出するには時間がかかる。先行研究においても、使用頻度を考慮した結果、初級では直接受身の作り方を、中級以降ではその他の受身の用法を、段階的に導入することが提唱されている（田中2005, 横田2011, 庵2012など）。前田（2011）は、「受動表現をどのように教えるかは初級・中級文法教育の課題の一つである」とし、シナリオにおける受身表現の使用実態を単文・複文という観点から分析している。その結果、受身表現の85%が複文の中で用いられていること、特に「ほめられてうれしくなった」のような「て」節の述語に受身表現が現れる場合が多かったことを指摘している。このように、より自然な例文を教育現場で提供するためにも、学習者の生活環境において必要な受身表現の使用実態を調査することは、有意義ではないだろうか。

本調査では、理工系大学院におけるゼミでの発表や質疑応答から収録した『理工学系話し言葉コーパス』を用い、「アカデミックなコミュニケーションの場」では、どのように受身表現が出現しているかを観察し、分析する。特に、アカデミックなコミュニケーションに特徴的な受身表現の用法にどのようなものがあるか、通常の初級教科書ではカバーできない表現はあるか、という観点から、教育現場への応用を検討する。

## 2 調査の概要

### 2.1 コーパスについて

『理工学系話し言葉コーパス』は、東京大学大学院の理工系7分野（電気系工学、都市環境工学、都市計画、建築学、社会基盤学、化学システム工学、情報理工学系・電子情報学）のゼミでの発表や質疑応答から収録したもので、延べ形態素数約180万である（菅谷他2019）。ゼミの構成員は留学生を含む大学院生および教員であるため、データは母語話者および非母語話者の発話からなる。本調査において

は7分野のうち「都市環境工学コーパス」（以下「コーパス」）形態素数215,837を調査の対象とした。都市環境工学とは、持続可能な都市環境を創出するための技術やシステムの開発に取り組む研究分野である<sup>[註1]</sup>。

### 2.2 調査の概要

本調査においては、『現代日本語文法2』に基づき、「動詞の語幹に「-(r)areru」という接辞を付加することによって、働きかけや作用、関係のあり方を受ける存在をガ格名詞として表現するもの」を受身表現として扱った。コーパスのデータから、「かれ」「がれ」「され」「ざれ」「たれ」「なれ」「ばれ」「まれ」「われ」「られ」と検索した語を抽出し、「尊敬」および明らかに「可能」「自発」と判断した語を除外した。また、「考えられる」「見られる」など、「可能」か「自発」、あるいは「受身」かで判断が分かれる語については、4節で検討することとし、それ以外の明らかに受身形と判断し、かつ文法的に適切なS28例が含まれる用例を抽出したものを調査・分析の対象とした。

上記のS28例を、受身表現の用法と出現位置によって分類した。受身表現の用法については諸説あり<sup>[註2]</sup>、例えば川村（2012）は、受身文の下位分類として「対応する能動文の有無（直接受身か間接受身か）」、「主語が有情か非情か」の二つの観点を紹介している。本研究では、日本語教育の現場で使われる用語として、高見澤他（2004）を参考に、「直接受身」「間接受身」「持ち主の受身」「非情の受身」に分けた。すなわち、対応する能動文がある「直接受身」のうち、有情物主語のものを「直接受身」、無情物主語のものを「非情の受身」とした。また、対応する能動文がない「間接受身」の中で、影響を被った人物を主語とし、その人物に属するモノや身体の一部が直接的な影響を受けた対象物をヲ格で表した受身文を「持ち主の受身」とした。

出現位置は、前田（2011）を参考に、「単文末」「複文末」「引用節末」「疑問節末」「連体節末」「連用節末」に分類した。受身形に複合辞が後接する場合は、複合辞を含めて受身表現とし、出現位置を上記分類基準に従って定めた。例えば、例1)のように、形式名詞「(～という)ところ」を伴う名詞節が「～です」に接続して文が終わっている場合は、単文末として分類した。例2)は、「～ことがある・ない」という複合辞が連用中止で出現したため、連用節末と判断

した。例3)は、「言いさしの文」<sup>【註3】</sup>と考えられるが、本稿では実質的に言い終わりの形と等価であると考え、文末と判断した。

- 例1)で、三番目には、大腸菌も検出されておるといところです。(単文末)  
 例2) (前略) 水素を添加した系においても、同様に、えっと、ビニルクロライドが分解されることもほとんどなく、エチレンの検出ということも、えっと、見られませんでした。(連用節末)  
 例3) (前略) 分からない、大体水温で上がって、冬、実験やたらうまくいかないというのは、昔から言われたことで。(複文末)

上述した判断基準に沿ってなお判断が困難だった11例については不明とし、517例を分類の対象とし、出現位置を特定した。分類の例を表1に示す。

表1 コーパス(「都市環境工学」)における受身表現の用法と出現位置の分類

用例	用法※	出現位置	
このF特異RNAフェージは、え、さらに、G1からG4の4つの血清型に、えー、 <u>分類</u> されます。	非情	単文末	文末
まず、ヘンリー定数の温度影響に関してなんですけど、(中略)ヘンリー定数は温度で変化をして、このような式で表されます。	非情	複文末	
(前略) まあ、いろいろな微生物が <u>含まれているだろうと</u> 考えられています。	非情	引用節末	非文末
いや、そうですねって言われちゃうとき、先生、 <u>なめられてるのか</u> と思っちゃうよ。	直接	疑問節末	
ASPIREも、えーと、締め切りは終わって、えーと、提出はしているので、 <u>採択されることを願</u> っています。	持ち主	連体節末	
(前略) cis-DCEについては、左側の図にありますように、えっと、添加した後に、cis-DCEが <u>分解</u> され、えっと、エチレンが出てくるような結果になりました。	非情	連用節末	

※直接：直接受身、間接：間接受身、持ち主：持ち主の受身、非情：非情の受身

### 3 結果と考察

#### 3.1 用法の分類の結果

明らかに受身形と判断した528例を含む受身表現を、「直接受身」「間接受身」「持ち主の受身」「非情の受身」の四つに分類した(表2)。

表2 受身表現の用法別の出現数と出現率

直接受身	23	4.3%
間接受身	1	0.2%
持ち主の受身	2	0.4%
非情の受身	502	95.1%
計	528	100.0%

用法分類においては、非情の受身が95.1%と圧倒的に多いこと、その他の受身はほとんど出現しないことが分かった。『現代日本語文法2』では、非情の受身(無情物主語)は能動主体の背景化が中心だとし、主語の前景化を動機とするタイプとしては主語の性質を述べるものが多いと述べられているが(日本語記述文法研究会編2009: 229, 231)、本コーパスにおいても、能動主体が背景化された表現が多く、モノの性質を述べる主語が前景化された表現も見られた。

#### 3.2 出現位置の分類の結果

受身表現を出現位置別に分類した結果を表3に示す。

表3 受身表現の出現位置別の出現数と出現率 ※ ( )内は前田(2011)

文末	単文	①単文末	24	4.6%	(65)	(15%)
		②複文末	125	24.2%	(55)	(13%)
非文末	複文	③引用節末	12	2.3%	(7)	(2%)
		④疑問節末	28	5.4%	(3)	(1%)
		⑤連体節末	158	30.6%	(73)	(17%)
		⑥連用節末	170	32.9%	(223)	(52%)
合計		517			(426)	

出現位置は、連用節末、連体節末、複文末と複文に多く出現した一方、単文末には受身表現がほとんど出現しなかった。前田（2011）のシナリオ分析では、非文末が全体の4分の3を占めること、特に連用節末での出現が半数を超えることが注目に値すると述べられている。本調査対象のコーパスにおいては、非文末が7割以上を占めている点は前田（2011）に近い結果と言える。しかし、単文末での出現率がさらに低くなっている点、および連用節末での出現率が32.9%である点が、前田（2011）の結果と異なっている。

### 3.2.1 文末における受身表現

#### 3.2.1.1 単文末

単文末における受身表現は24例（46%）であった。以下に単文末の用例を挙げる。

例4)（前略）この中で、え、G2型とG3型は主にヒトふん便中から、G1型とG4型は主に動物ふん便中から検出されます。

例5) で、このピコルナウイルス属に分類されております。

#### 3.2.1.2 複文末

複文末に現れる受身表現は125例（24.2%）あった。以下に複文末の用例を挙げる。

例6) このMRIに用いられるGadoliniumというのは、非常に安定な錯体として造影剤として使用されます。

例7)（前略）そういう文献は見つけていないんですけども、その一、ユーロピウムとか、その、ほかの文献とかについては、それは報告されています。

#### 3.2.1.3 文末表現に見られた特徴についての考察

単文末および複文末に見られた特徴について、2点述べる。

第一に、単文末と複文末におけるテンスとアスペクトの形式と出現数を表4

に示す。言いさしで終わっている2例を除いて、文末に出現するテンス・アスペクト形式を、寺村（1984）を参考に「る」、「た」、「ている」、「ていた」、「てきた」に分類した<sup>[註4]</sup>。

表4 単文末と複文末におけるテンス・アスペクト形式と出現数

る	た	ている	ていた	てきた	合計
35	26	82	3	1	147

前田（2011）は単文末65例を分析し、「た」が最も多く、全体の半数以上を占めていたことを報告している。一方、本コーパスにおける単文末と複文末においては「～ている」が最も多く、82例（55.8%）であった。前田（2011）は単文末のみを分析しており、単文末と複文末を合計した本調査と単純な比較はできないが、シナリオにおいては一回限りの出来事を表す「た」が多く出現するのに対し、アカデミックなコミュニケーションにおいては、「～ている」というアスペクト形式を用いて、主語の状態を客観的な認識として述べたり（例5）、結果の状態を表したり（例7）することが多いと考えられる。

第二に、「て」「～ので」の接続助詞および「～と」の引用助詞について述べる。2.2で述べたように、上記のような表現が文末に来た場合、言い終わりの文と考え、「文末」と判定した。

例8) えーと、発生するメタンと二酸化炭素のうち、メタンのほとんどは気相に出てきて、えーっと、二酸化炭素は気・液・固相に分配されますので。

例9) 何て言うか、元素ごとに並べた場合に、ほとんどクラプトンになるというのが、まあ、よく言われているんですけど。

例10) この下水処理場の、えー、最初、沈殿時というのは、晴天時に流入すると予想される最大下水量の3倍までが受け入れ可能となるように設計されておりました。

例11)（前略）まず気象庁の観測によると、その14日午後2時から、えー、15日午前1時にかけて、えー、0.5から1.5mm/hourの降雨が観測されていると。

上記に挙げた中で、特に、例11)の「～と」の形の言いさしは、大学講義の講義者の発話に見られる「資料の引用」(石黒2015: 21)に当たるとされる。気象庁のデータの引用部分を提示し、発表者が聞き手とともに確認するという働きをしている。このように、「受身形+と」が文末に来る表現は本調査が対象としたゼミ発表のような場でも使われる表現であるため、当該表現もアカデミックな場面での話し言葉の特徴の一つと考えてもよいのではないだろうか。

### 3.2.2 非文末における受身表現

#### 3.2.2.1 引用節末

引用節末においては、受身表現は12例あった。表5は、引用節の後に続く動詞の形をまとめたものである。後続動詞には、「思う」「予想する」のような思考動詞や「言う」「書く」などの表現に関する動詞が出現した。

表5 引用節に後続する動詞(出現形)と出現数

思う	4
言う	4
予想する(予想される)	2
書く(書いてある)	1
考える(考えられている)	1

例12) おそらく、希釈されているんだと思っております。

#### 3.2.2.2 疑問節末

疑問節末においては、受身表現が28例であった。表6は、疑問節の後に続く動詞の形をまとめたものである。後続動詞には思考動詞や物事を検証する類の動詞(計算する、検討する、調べる等)が出現した。

表6 疑問節の後続する動詞(出現形)と出現数

分かる(分からない6、《どれだけ》分かる1)	7
考える	5
見る	2
実験とする	2
思う、書く、計算する、検討する、調べる、推定する、やる、理解する	各1
不明	4

例13) 硫酸イオンの減少量は酢酸でも使われるかも分かんないから、酢酸がどれだけ使われたかが分かりませんと。

#### 3.2.2.3 連体節末

連体節末に現れた例は158例である。それらについて、被修飾名詞が実質名詞(例14)か、形式名詞(例15)かによって分類した。先に述べたように、形式名詞が「～ことがある」のような複合辞となって文末に出現している場合は、単文末か複文末に分類した。結果を表7に示す。

表7 連体節末の受身表現が修飾する名詞の分類と出現数

実質名詞	形式名詞						合計
	の	こと	もの	とき	ほど	際	
126	16	8	5	1	1	1	158

例14) えー、こういった分解しやすい物質を、分解されにくい物質と組み合わせることで、えー、その汚染がどれだけ新しかったとか、ですね、(後略)。

例15) ASPIREも、えーと、締め切りは終わって、えーっと、提出はしているので、採択されることを願ってます。

前田(2011)では、実質名詞と形式名詞の数が40対33と拮抗していたが、本調査においては、「データ」「濃度」「物質」「地点」などの実質名詞が126例(79.8%)であった。すなわち、アカデミックなコミュニケーションにおいては、受

身表現の被修飾名詞は実質名詞が著しく多いことが分かった。また、前田(2011)では形式名詞においては「の」(9例)よりも「こと」(13例)が多く出現していたが、本コーパスにおいては、「こと」(8例)よりも「の」(16例)のほうが多く出現した。

### 3.2.2.4 連用節末

連用節末に現れた受身表現は170例である。受身表現に接続する形式によって下位分類した。その結果を表8に示す。

表8からも分かるように、「て」節が49例(28.8%)と最も多く、次に連用中止が24例(14.1%)となっている。前田(2011)においては「て」節が223例のうち102例(45.7%)である一方、それ以外の表現はどれも15例(6.7%)以下であったことを考えると、連用中止の出現の多さは本コーパスの特徴を表していると言えよう。連用中止は書き言葉で用いられることが多いが、アカデミックな場面では話し言葉においてもよく使用されていることがわかる。連用中止は、初級というよりは中級レベルにおいて導入されることが多いが、初級レベルにおいても理解できるよう適宜導入することも有効であると考えられる。

表8 受身表現が現れる連用節(形式別)と出現数

形式	出現数	割合	
て	49	ば	4
連用中止	24	たら	4
ので	15	ことから	4
が	15	で	4
けれども(けど)	11	にもかかわらず	3
と	7	のに	2
ても	6	ところで	2
から	5	場合	2
		間に、し、時に、時は、とおりに、中で、てから、まで、までも、以来、際、ため、ように	各1

## 4 「-(r)areru」形で出現する頻度の高い動詞に関する分類

先に述べたように、第3節までにおいては、自発か可能か受身か判断が困難だったもの(「られ」)は全て除いて分類した。「見られる」「考えられる」「得られる」などは、コーパスの前後の文脈を見ても、意味の区別が難しい場合があった<sup>[註5]</sup>。そのため、本節では受身表現の範疇に限ることなく、「られ」で検索して出現した表現(730語)を、前接する動詞を中心に出現頻度を調査した。その中の上位14位(16語)までを表9に示す。表10には、中俣(2014)で挙げられている『現代日本語書き言葉均衡コーパス(以下、BCCWJ)』における出現頻度1から10位までの動詞、表11には、中俣(2014)で挙げられている初級教科

表9 「-(r)areru」形で出現する頻度の高い動詞(本コーパス)

順位	動詞	チュウ太級別 <sup>[註6]</sup>	出現頻度	出現率
1	考える	N4	103	14.1%
2	検出する	級外	77	10.5%
3	得る	N2N3	46	6.3%
4	言う	N5	41	5.6%
5	見る	N5	40	5.5%
6	使う	N5	24	3.3%
7	分解する	N2N3	19	2.6%
7	報告する	N2N3	19	2.6%
9	する	N5	17	2.3%
10	知る	N5	14	1.9%
10	含む	N2N3	12	1.6%
12	示唆する	級外	11	1.5%
13	単離する	級外	10	1.4%
14	挙げる	級外	9	1.2%
14	思う	N4	9	1.2%
14	希釈する	級外	9	1.2%

表10 BCCWJにおいて「られる・れる」に前接する動詞(中俣2014:242出現数のデータを略)

順位	動詞	%
1	言う	4.58%
2	する	3.75%
3	行う	2.94%
4	みる	2.25%
5	考える	2.01%
6	思う	1.86%
7	呼ぶ	1.66%
8	使う	1.06%
9	認める	0.99%
10	作る	0.88%

表11 初級教科書によく出る受身表現(中俣2014:242)

教科書に多い動詞	順位
開く	22
立てる	72
押す	124
叱る	159
読む	172
ほめる	212
壊す	495
踏む	950
泣く	1,160
降る	1,490

※順位=BCCWJの16,868動詞中の順位  
※網掛け=複数の初級教科書に出現

書で出現頻度の高い動詞の一覧（BCCWJにおける順位付加）を示す<sup>[註7]</sup>。

本コーパスにおいては、表9に挙げたように、「考える」「言う」「思う」といった思考や言語活動に関する動詞や、「見る」「知る」といった認知や知覚に関する動詞などが高頻度で出現した。これらの動詞は日本語能力試験のN4からNSレベルで、初級レベルの学習で習得するものである。また、「示唆する」（例19）、「報告する」（例7）などのサ変動詞も複数見られた。さらに、「検出する」（例1,4）、「分解する」（例2）、「希釈する」（例20）等、都市環境工学という専門分野の特徴を反映したサ変動詞が目立った。

- 例16) 今回、その、土壌から持ってきた微生物を使っているということで、まあ、いろいろな微生物が含まれているだろうと考えられています。
- 例17) 増殖環境については、25度から50度の温水環境中で、増殖しやすいことが知られています。
- 例18) アンモニア酸化菌では大体一日くらいはかかるというふうに言われているので。
- 例19) このため、えー、放流水中では、え、G4型が最も高濃度となっておりまして、え、処理水中においては、G1型は優先種となっている可能性が示唆されました。
- 例20) そうすると、雨で希釈されて、まだ生、あの一、越流、CSOは出てないけれども（後略）。
- 例21) また、シグナル値が偽陽性のものは、本当の陽性のものより相当低いということが分かったので、適当な判定基準を設定できる可能性があると思われます。

本コーパスで出現頻度が1位の「考えられる」や14位の「思われる」は、BCCWJ（中俣2014）においてもそれぞれ5位と6位に位置しているが、複数の初級教科書で扱われていないことが分かる。既に述べたようにそれぞれの動詞の能動形は初級レベルで学習するため、アカデミックなコミュニケーションを必要とする環境で学ぶ学習者に対しては、これらの思考に関する動詞の「-(r)areru形」は学習の早い段階で導入するほうが望ましいであろう。

さらに、表9に挙げた出現頻度上位の動詞の「-(r)areru形」が全ての動詞の活用形の中で出現する割合を調べた結果、「報告する」「含む」「挙げる」は「-(r)areru形」が半数近くを占め、「示唆する」に至っては84.6%を占めることが分かった（表12）。中俣（2014）は受動文と能動文では異なる意味になる動詞として「見られる」等を挙げ、教育の現場において、能動文との対応ではなく「フレーズ」として指導することが有効だと述べている。アカデミックな口頭表現においては、「見られる」の他、表12にある動詞の「-(r)areru形」も、フレーズとして導入することが有効だと言えるのではないか。

表12 出現頻度14位までのうち、「-(r)areru形」の出現割合が高い動詞一覧

動詞	A動詞の出現数	B「-(r)areru」の出現数	B/A(%)
報告する	46	19	41.3%
含む	21	12	57.1%
示唆する	13	11	84.6%
挙げる	19	9	47.4%

## 5 教育現場への提言

本調査の目的は、アカデミックなコミュニケーションに特徴的な受身表現とは何か、コーパスにおける使用実態を探ることであった。

受身表現の出現傾向から、①モノが主語となる非情の受身が多い、②文末は「～ている」の形が多い、③連用節末には、前田（2011）と異なり連用中止の出現率が高いことが分かった。また、「-(r)areru形」に拡大して分析すると、④「-(r)areru形」での出現頻度が高い動詞のうち、複数の初級教科書で受身形としては取り上げられていない動詞（考えられる、思われる）があること、⑤全活用形の中で「-(r)areru形」の占める割合が高い動詞（示唆する、含むなど）があることが分かった。

すなわち、アカデミックなコミュニケーションに出現する受身表現は、出現傾向に偏りがあり、書き言葉的な特徴を備えているため、初級教科書に即した授業内容だけではカバーできないことが分かった。

先行研究（田中2005, 横田2011, 庵2012など）で述べられているように、初級では直接受身の作り方を、その他の受身の用法については中級以降で、段階的に導入することが提唱されている。しかし、本調査が対象とする理工系の留学生を取り巻く言語使用環境を考慮すると、①モノが主語である非情の受身、②「受身形+ている」の形、③連用節末では「受身形のテ形」のみならず「受身形の連用中止」を含めた表現、を学ぶことが重要であることが分かった。また、④初級教科書であまり扱われていない「考えられる」「言われる」などの「-(r)areru形」を、学習者のニーズに応じて、文法項目としてではなくフレーズとして、早い段階から適宜取り入れていく必要があるのではないだろうか。

このように、学習者の生活環境において使用頻度の高い受身表現を学ぶことは、たとえ初級レベルの学習者であっても、アカデミックな場での日本語の理解に有効であり、学習意欲を促進する効果も期待できるだろう。

〈東京大学・東京大学・広島工業大学・横浜国立大学・青山学院大学・東京農工大学〉

## 注

- [注1] …… 東京大学都市環境工学専攻ホームページ  
<http://www.env.tu-tokyo.ac.jp/> 2021年7月24日時点アクセス
- [注2] …… 『現代日本語文法2』では「直接受身」「間接受身」「持ち主の受身」の三種類に分類した上で、「直接受身」の中で、主語と能動主体が「有情物」か「無情物」か、その組み合わせ別に分類し、「無情物」が主語となる場合は主語の前景化、又は能動主体の背景化を動機としていると述べられている。益岡（1982）は、主語の前景化と背景化に注目し、「受影受動文」、「属性叙述受動文」、「降格受動文」に分類している。
- [注3] …… 白川（1996）は、ある種の接続節が「言い切り」の形の文と等価の機能を持つと述べている。
- [注4] …… 「細菌が運ばれてくる」のように動きの方角を表す例文においては、アスペクトとは見なさず、「る」形と判断した。
- [注5] …… 川村（2012）は「受身文もまた意味によって定義する方が有効である」と、意味によってラレル形が「受身・可能・自発」などに分類できる可能性を示唆している。だが、「見られる・考えられる・得られる」などは、コーパスの前後の文脈を見ても、意味の区別が難しい場合が多かった。例えば、「vcrAがあるのであれば、その最後のVCから一連の反応が進むと考えられるので

…」の「考えられる」は、「主体がある意志的な動作を行おうとするとき、それが可能か不可能かを表すものである」（日本語記述文法研究会編2009:211）ことから、また「ラレル形の意味が可能の解釈に偏る動詞」（志波2018:315）から「可能」の用法であると推測できる一方、「動きや思考、感情が、主体の意志とは無関係に、あるいはそれとは反する形で自然に生起することを表すものである」（日本語記述文法研究会編2009:211）ことから「自発」であるとも推測できる。

[注6] …… 日本語読解学習支援システムリーディングチュウ太  
<http://language.tiu.ac.jp/> 2020年11月30日時点アクセス

[注7] …… 中俣（2014）は『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）と7つの初級教科書『みんなの日本語初級』『新文化日本語初級』『初級日本語』『日本語初級』『日本語初歩』『げんき』『Situational Functional Japanese』を調査対象としている。

## 参考文献

- 庵功雄（2012）「文法シラバス改訂のための一試案—ボイスの場合」『日本語／日本語教育研究』3, pp.39-55.
- 石黒圭（2015）「大学講義の文末表現の機能—引用助詞「と」で終わる文を例に」『一橋大学国際教育センター紀要』6, pp.17-29.
- 川村大（2012）『ラレル形述語文の研究』くろしお出版
- 志波彩子（2018）「受身と可能の交渉」『名古屋大学人文学研究論集』1, pp.1-19.
- 白川博之（1996）「ケド」で終わる文」『広島大学日本語教育学科紀要』6, pp.9-17.
- 菅谷有子他（2019）「理工系留学生のための語彙・用例検索ツール「レインボー」完成版の公開—7分野への拡充および分野間共通の自立語の追加採録」『2019年度日本語教育学会秋季大会予稿集』pp.288-293.
- 高見澤孟監修、伊藤博文・ハント 蔭山裕子・池田悠子・西川寿美・恩村由香子（2004）『新・はじめての日本語教育 基本用語事典』アスタ
- 田中真理（2005）「学習者の習得を考慮した日本語教育文法」野田尚史（編）『コミュニケーションのための日本語教育文法』pp.63-72. くろしお出版
- 寺村秀夫（1984）『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- 中俣尚己（2014）『日本語教育のための文法コロケーションハンドブック』くろしお出版
- 日本語記述文法研究会編（2009）『現代日本語文法2』くろしお出版
- 前田直子（2011）「受動表現の指導と「拡大文型」の試み」『日本語／日本語教育研究』2, pp.67-84.
- 益岡隆志（1982）「日本語受動文の意味分析」『言語研究』89, pp.48-64.
- 横田亜朱紗（2011）「コーパスを使用した受身文調査—受動化の意味による分類から」『国目白』50, pp.90-99.



